

8 「今アジアでノーベル賞に最も近い作家」莫言との対

談（毛丹青が通訳） 要約（2011（平成23）年7月26日）

（事務所だより第14号・平成22年新年号5頁より）

1) 事務所だより第17号盛夏号で予告したとおり、7月26日、アジアで最もノーベル文学賞に近い中国人作家と言われている莫言との対談が実現した。読売新聞による公式の日本訪問の合間にこれを企画したのは、今や坂和の「好朋友」となった神戸国際大学教授の毛丹青。今回は①坂和総合法律事務所での午前中の公式対談の他、②大阪天満宮の斜め向かいで、日本初のノーベル文学賞作家川端康成生誕の地にある料亭・相生楼での昼食会、③超豪華なりゾートホテル・エクシブ有馬離宮にゆっくり一泊し、夕食時はもちろん、莫言の大好きな温泉に浸かっての温泉談義(?)と盛りだくさん。さてその成果は？

2) 毛丹青から6月9日午前8時頃にかかってきた電話によって企画が決まった後、坂和は急遽“文学おじさん”に変身！莫言原作の映画は『紅いコーリャン』（87年）、『至福のとき』（02年）、『故郷の香り』（03年）の3本を観て評論していたが、原作本は読んでなかったため直ちに莫言の著書を買求め、まずは最新作『蛙鳴』を家系図を作成しながら読破。続いて『赤い高粱』、『白檀の刑』上下、『築路』とメモを作りながら読み進んだが、『転生夢現』上下と『四十一炮』上下は残念ながら途中まで。しかし坂和事務所恒例の7月25日の天神祭パーティーを中止してまで猛勉強した甲斐あって、直前には各種のレジメと資料が完成。頭の中が莫言作品一色となった状態で対談に臨むことに。



3) 1955年に山東省高密県の農村で8人兄弟の末っ子として生まれた莫言の子供時代は、飢えと孤独がテーマ。中農だった莫言一家は1966年から77年まで続いた文化大革命の中で苦しい思いを。76年に人民解放軍に入った莫言は85年から作家活動を開始。張(チャン・)芸(イー)謀(モウ)監督の『紅いコーリャン』（87年）によって、一躍莫言の名前も世界中に知れ渡った。その後次々と続く大作の発表に世界はビックリ！そんな莫言との対談は①坂和の莫言作品に対する評価や質問に始まり、②坂和的中国電影評価③日中文学作品評価④作家と弁護士との感性の異同⑤毛丹青を含めた3人が生きてきた日中の時代変遷の中での問題意識のあり方、等々多岐に及んだ。これらはすべてVTRとICレコーダーで録画・録音しているので、折りに触れて公開していきたい。約2時間の対談後は、①記念写真の撮影②莫言からの書の贈呈③サイン会を経て終了。実に有意義な対談となった。



4) 「相生楼」ではまず川端康成生誕の地と刻した石碑の前で記念撮影。古式豊かな料亭にふさわしい松花堂弁当を食べながらもいろいろと盛りあがった。



夜の有馬離宮での話題の中心は、①7月23日に中国の温州で起きた高速鉄道脱線事故の話題②その賠償処理についての弁護士としての坂和の見解、となった。毛丹青自慢のアイパッドによれば、この鉄道事故について莫言や毛丹青がツイッターの中国版「微博」で発言すれば、その反応は数万～数十万件に上るらしい。午前中の公式対談はもちろん、有馬離宮での温泉あがり談義がツイッターにのれば、たちまちそれが中国全土を駆けめぐらるわけだ。その影響力を考慮しながら、3人の温泉談義はいつまでも・・・。



5) 翌朝はゆっくりと露天風呂に浸り、バイキングの朝食を食べ、チェックアウト後、有馬離宮内で記念撮影をした後、有馬温泉街の散策へ。狭い路地ではまず毛と猫、莫言

と猫などの芸術写真(?)を。続いて極楽寺や太閤橋等で記念の2ショットを。これにて約1時間がアッという間に過ぎ、あとは特急バスで一路大阪へ。その後莫言は京都駅にて読売新聞社担当者のお迎えを受けて、東京での講演会に臨むことに。

